

論文

トインビーのロシア観とスラヴ¹⁾観 —『歴史の研究』における西欧文明の第一の比較対象として—

近藤喜重郎

1. はじめに

本稿は、アーノルド・J・トインビー（1889–1975年）の主著²⁾『歴史の研究』³⁾（1934–1961年）におけるロシア観とスラヴ観を検討することを目的とする。本書は、世界の諸文明を中心文明と周辺文明とに分類した、比較文明学史における画期的な研究であり⁴⁾、文明学の基本的図書⁵⁾、「多くのテーマが数限りなくつまつた宝庫」⁶⁾である。本稿では、以下、この「宝庫」の内容の一部を、現在の視点から、ロシアとスラヴとに主題を限定して論ずることになる。

ロシアとスラヴは、無論、『歴史の研究』の主題ではない。しかしロシアは、本書においてビザンツまたは正教キリスト教（英Orthodoxy、露Православие）文明の「分枝」またはその「第二の拠点」として、西欧文明の第一の比較対象であり、またその長い執筆期間を通して位置づけを迷わせる困難な素材の一つであった。「トインビーのロシア観と言えば、最後まで定まらない、謎であった」⁷⁾とさえ言われる。さらにスラヴは、本書執筆当時の動向により、トインビーのテーゼ「歴史的思考の相対性」を説明するうえで重要な契機を成している。

2. 序論に見るロシアとスラヴ

トインビーは、『歴史の研究』の序論「A 歴史的思考の相対性」において、その題目ともなっている自らのテーゼ「歴史的思考の相対性」の論証および歴史研究の合理的かつ理解可能な分野の探求を自らの課題と定め、この「分野」を「文明」と仮定している。また、この課題を説明するために、国家と国民意識の関係を論じている。

この検討において彼は、ロシアとスラヴの名を出していない。しかし、次の通り、チェコスロヴァキアとユーゴスラヴィアの事例を引いている。

極端な例として、1914–18年の世界戦争終結以後、国家として承認されたばかりの諸国（のうちの一国を中心として、西欧社会の歴史を書いてみると想像しよう。そうすると、12世紀以上存在している社会の歴史を、その存在すらまだ確立されていない国家を中心として書くということである。チェコスロヴァキアあるいはユーゴスラヴィアの国民意識がはたして存在しているかどうかに関する議論はまだ終決していない⁸⁾

チェコスロvakiaとユーゴスラヴィアは無論、スラヴ民族の国家である。現在、両国とも国家としては解体し、トインビーが上で書いている議論は、それ自体としては意味をなさなくなつた。しかし、彼がここで取り上げている、国家と国民意識の問題は、今なお、またトインビーのテーゼである歴史的思考の相対性を理解する上でも、重要である。トインビーは、歴史的思考の相対性について説明するに際し、様々な国や地域の事例を引いている（このことは、上の問題がスラヴ民族国家にのみ係わるものではなく、広く世界レベルで係わるものであることを示している）。

序論「A 歴史的思考の相対性」でトインビーが取り上げた国や地域の登場数をまとめると、表1の通りになる。

表1 『歴史の研究』「A 歴史的思考の相対性」における国や地域の登場数

1回	エチオピア、トラキア、カナダ、ラテン、イスラエル、アジア、ガリア、ドイツ、オランダ、スイス、ポルトガル、ノルウェイ、ビザンツ、オーストリア、ハンガリー
2回	アメリカ、ギリシア
3回	ローマ
4回	ヨーロッパ
5回	エジプト
6回	ローマ
8回	イギリス
11回	チェコスロvakia
13回	ユーゴスラヴィア
26回	フランス

これに見る通り、フランスの名が一番多く登場している。チェコスロvakiaとユーゴスラヴィアは、その次に多く登場している。トインビーは、上述の通り、「理解可能な歴史研究の分野とは何であるか」を問題にしたのであるが、その具体的な事例としては、主としてフランスをチェコスロvakiaおよびユーゴスラヴィアと比較したのである。フランスでは、民族社会と民族国家がほぼ同時期に成立し、このことは他の社会からも認められたが、ユーゴスラヴィアとチェコスロvakiaでは、19世紀後半に国民意識が誕生しつつも、20世紀まで民族国家の成立が認められることができなかったといい、このことからトインビーは、フランスを大国と見做す一方、残りの二国を小国と見做し、「こういう小国の観点から西欧社会の歴史を考えることはできない」⁹⁾と述べている。

他方、ロシアの名は、「A 歴史的思考の相対性」に続く「B 歴史研究の分野」の次の文脈においてはじめて登場する。

われわれが最近の一章である近代産業方式の確立に関する一章から出発するとすれば、

トインビーのロシア観とスラヴ¹¹観
—『歴史の研究』における西欧文明の第一の比較対象として—

それが前提とする「理解可能な研究分野」は、世界大である。イギリスの産業革命を説明するためには、われわれは他のヨーロッパ諸国の経済状態のみならず、熱帯アフリカ、アメリカ、ロシア、レヴァント、インドおよび極東の経済状態を考慮に入れなければならない……議会制度の確立の章にさかのぼり、こうして、経済面から政治面へと移行すると、われわれの水平線は縮小する。フランスおよびイギリスに於いて、ブルボン王家およびスチュワート王家を支配した「法則」は、ロシアのロマノフ王家、トルコのオスマンリ王家、インドのチムール王家、シナの満州王朝（清）、または同時代の日本の徳川将軍家に対して効力を持っていた¹⁰。

ここに見る通り、トインビーにとってロシアは、西欧近代を研究する際に前提となる世界レベルの歴史において、ヨーロッパ諸国、熱帯アフリカ、アメリカ、レヴァント、インド、極東と同じレベルの構成要素である。また、西欧を支配していた政治法則の及ばない、いわば西欧社会との間にある種の臨海線を作り出す存在である。

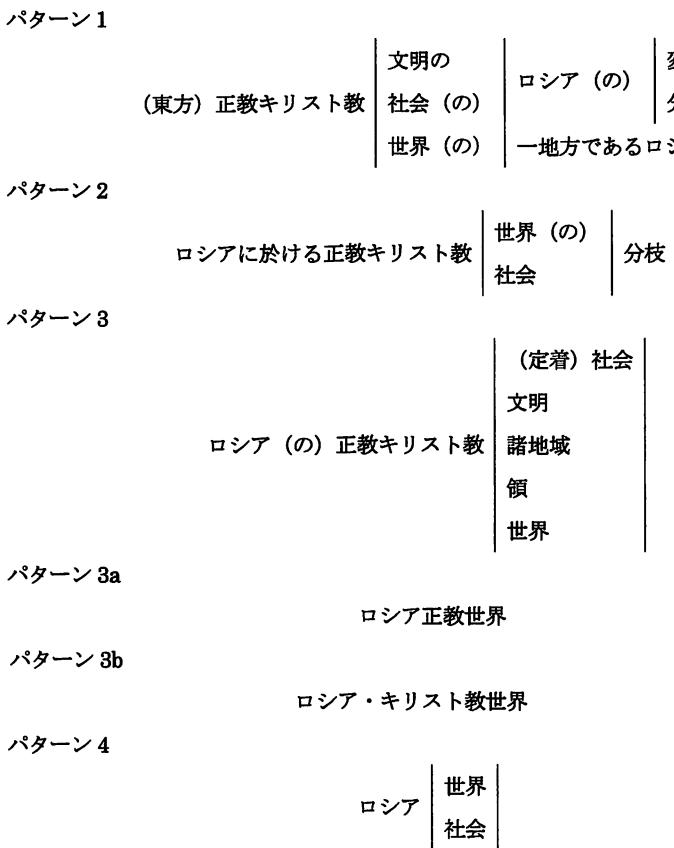
以上の通り、スラヴは、トインビーの問題意識において、西欧社会を研究する際に第一に比較されるべき、その構成要素を提供する素材である。他方でまた、その一派であるロシアは、西欧社会を支配する「法則」の及ばない、かつ西欧社会と同じレベルの隣接地域として、重要な素材をなしている。

3. 正教キリスト教文明の一部として

『歴史の研究』において、ロシアとスラヴは、基本的に、正教キリスト教文明またはビザンツ文明との係わりのなかで説明されている。このことは、トインビーが、「ロシア文明」の用語を用意せずに（後述）、ロシアにおける文明を、正教キリスト教の名を冠して称していることからも明らかである。トインビーは、『歴史の研究』において、ロシアの文明を、「ロシア」、「正教キリスト教」、「文明」、「社会」、「世界」、「変種」、「分枝」、「一地方」、「領」、「諸地域」の用語を組み合わせて表現しており、その組み合わせは、およそ図1の通りに整理できる。

図1に見る通り、ロシアの文明または社会に対するトインビーの表現を整理すると、主として3つの点を指摘できる。第一に、トインビーの叙述においては、文脈に応じて、文明が社会、世界、諸地域、領と入れ替えられている。このことから、文明概念の多義性が確認される。第二に、ロシアの文明または社会に対するトインビーの表現には、大きく4つのパターンが確認できる。トインビーの思想は、第一次大戦の始まりから第二次大戦の終わりまでの前期と第二次大戦の終わりから死に至るまでの後期とに大きく分けられ、その間に7年の断絶があったというが¹¹、上の組み合わせからも、その変化が確認される。すなわち、パターン1と2には、「分枝」または「変種」という概念が見られ、パターン3と4ではこれがない¹²。第三に、パターン4では見られなくなるが、その他すべてのパターンでは、正教またはキリスト教の名が付せられている。

図1 ロシアの文明に関するトインピーの表現の組み合わせ



ロシアは、ヴラヂミル聖公の治世に属す988年（または989年）に、ビザンツ帝国から正教を導入した。このことから、文字、建築、宗教など、文明の主要構成要素をビザンツ文明に倣うことになった。ゆえに、トインピーは、ロシアの文明を、ロシアにおけるビザンツまたは正教キリスト教文明の亜種と見做し、ロシアを含む正教キリスト教文明を、西欧社会を理解する上で第一に比較すべき対象と考えた¹³⁾。なぜなら、西欧社会は、西ローマ帝国からカトリシズムを導入して、自らの文明を育成していったからである。ビザンツ帝国と西ローマ帝国がローマ帝国という一つの帝国から、また正教キリスト教とカトリシズムがキリスト教という一つの高等宗教から分岐したことは、言うまでもない。

トインピーによると、正教キリスト教文明は、アナトリアに始まり、後にバルカン半島へ、さらなる後にロシアへその「重心」を移したという¹⁴⁾。ただし、バルカン半島における正教キリスト教文明は、その「分枝」ではなく、「本体」の一部と見做されている。それというのも、アナトリアとバルカン半島の正教キリスト教社会が、ともにビザンツ帝国に属したことがあり、またムスリムの支配を——同じキリスト教のローマ・カトリック教徒の支配ではなく——選び、受け入れたから、言い換えれば、運命を共有したからであろう¹⁵⁾。

トインビーのロシア観とスラヴ¹⁾ 観
—『歴史の研究』における西欧文明の第一の比較対象として—

ロシアもまた、トインビーによると、正教キリスト教を導入したことによって、ビザンツ帝国の統治下に入ることを認めたというが、実に、ビザンツ帝国軍がキエフまで進軍したことなく、無論、ビザンツ軍がキエフに駐留したこともない。トインビーの指摘している通り、ロシアとビザンツ帝国は、互いに黒海とステップを隔てて距離を保ちつつ交流した¹⁶⁾。すなわち、ロシアは、政治的独立をあらかじめ確保したうえで、その名目上の政治的支配を受入れたと考えられる。無論、ロシアがムスリムの支配を受入れたこともない。

そもそも、ロシアを含むスラヴは、トインビーにとって、6世紀に、「ヨーロッパ北部の森林地帯から」¹⁷⁾ 歴史に登場した、ビザンツの蛮族であった。すなわち、当時「依然としておよそ二千年前と同じ状態にあった」¹⁸⁾、異民族との接触のなかった素朴な民族であったスラヴ人は、6世紀に、アヴァール人によって「人間家畜」¹⁹⁾とさせられることによって、素朴な、戦争を知らない原始社会から「覚醒」して、ビザンツ帝国の辺境に登場した。

彼らは、地中海社会とスカンディナヴィア社会を分断する形で、南はバルカン半島、北はバルト海沿岸まで移動し定住しなおした。また、それぞれの地域の支配民族に統治される形で分断されて、新たな社会を形成した。例えば、バルカンのスラヴ人は、ビザンツ社会の辺境としてブルガリアを形成し、また黒海北岸からバルト海に至る地域のスラヴ人は、スカンディナヴィア人とともにキエフ・ロシアを形成した²⁰⁾。他のスラヴ人は、西欧社会と正教キリスト教社会のはざまで抑圧された民族となつたが、セルビア人は、ブルガリア人およびギリシア人とともに正教キリスト教文明の本体を構成した²¹⁾。

以上の通り、ロシアとスラヴの名は、主として正教キリスト教文明との係わりのなかで、またその一部をなす要素として述べられている。

4. 西欧文明との係わりのなかで—ピョートル一世の存在

ロシア史において「ピョートル以前 доперовский」という言葉がある。ロシア史の時代区分としてはもっとも大きな枠組であるが、実に、トインビーにあっても世界史は、ピョートル以前と以後とで大きな違いがある。

1967年のトインビー来日歓迎会の記録²²⁾によると、トインビーは、その講演のなかで西欧文明、古代ギリシア文明、中国、日本、アメリカ、アラブ、インド、アフリカのことなど、多岐にわたるテーマに触れたが、その一方で、彼が講演の中で具体的にその名を上げて言及した歴史的人物は、2名であったという。一人は古代ギリシアの詩人ソロン²³⁾、そしてもう一人がロシアのピョートル（一世、在位1682–1725年）である²⁴⁾。ピョートルの名は、トインビーの世界史においてもっとも多く登場する人物名のひとつであるが、トインビーによると、ピョートルのロシアによって、「世界がだんだんと統合されつつある」²⁵⁾ 時代が始まったという。

トインビーはまた、「非西欧の人々のほうが、人類の歴史、人間全体の歩んできた道に対して、われわれ西欧人よりもより広い視野を持っていた」²⁶⁾と主張し、その例証としてピョートルを取り上げている。例えば、彼は、カスピ海沿岸に遠征した時に、アゼルバイジャンの油田に自国の国益の観点から目を向けた。彼の視点は、「西欧の「経済人」(Homo

Economicus) の苦心した発見に殆んど二世紀先駆けていた」²⁷⁾、すなわち現代の国際経済および国際政治の視点にも通ずるものである。ピヨートルこそ、ロシアのみならず、西欧人から見ても200年先を見越していた天才、すなわちロシアの生んだ、世界史における天才の人である。

ロシアは、ピヨートル以来、熱心に西欧文明の成果を学んだ。西欧文明にとっては第一の弟子であったロシアは、20世紀に西欧が開発した世界最強の兵器である核兵器を手にしたのであるが、このことは、トインビーの目には、「西欧諸民族」の「免許皆伝の弟子」となったことを意味した²⁸⁾。その一方、マルクス主義を国是として掲げたことから、「今や西欧に対する文化的反動に入った」²⁹⁾とも言われている。

無論、ピヨートルのロシアだけが「西欧文明の場に引き入られた」³⁰⁾非西欧の文明であったというわけではない。すなわち、ロシア以外の正教キリスト教民族のうちの二つ—ギリシア人とセルビア人—は、ロシア人と同じくらい早くから西欧化し始め³¹⁾、「それいらい、非西欧社会は次々とロシア人にならった」のである。なお、21世紀の現在では、ハンチントンの「文明の衝突」論に見るまでもなく、イスラム社会も（またアジア社会も）西欧に対する「文化的反動」に入っていると思われる。

トインビーによると、ロシアのピヨートル以降の西欧化とレーニン以降の共産化は、「一時的に流行した西欧の型の異国的な変わった服」³²⁾に「替えた」だけであり、その「身体と精神」は、なお正教キリスト教文明のままであったという。トインビーから見れば、レーニンさえ、その洗礼名がヴラヂ米尔であること³³⁾から、正教キリスト教文明に属する人間であり、また「ピヨートルの真の後継者」であった³⁴⁾。また、ソヴィエト連邦も、「独自の生活を続けようという意志によって採用した西欧の衣装をまとった生活にしがみついているロシア正教の世界国家と見做すこと」³⁵⁾ができるという。

このように、トインビーは、ピヨートル以後も、また共産主義革命以後も、ロシアは正教キリスト教文明のままであるという³⁶⁾。特に、この見解において、文明には、「身体」と「精神」または「意志」、そして「服」または「衣装」があるという点は特筆すべきであろう。筆者には、これらの隠喩の用法に文明の構造論の芽があると思われる所以であるが、トインビーは、これらを自らの理論の用語としては整えていない。文明間の出会いに基づいた構造論を整えると、トインビーが念頭に置いていた、文明の「変動論が崩れ去る可能性がある」³⁷⁾からであろうか。

そもそもロシアは、正教キリスト教文明から、その「服」または「衣装」を借りてきたのではあるまい。また、その「服」とは何か。問題が残されている。

5. スカンディナヴィア文明との係わりと文明の構造論

ロシアは、10世紀の段階で、ビザンツだけから文明を受入れたというわけではない。次に見る通り、ビザンツ文明以前には、スカンディナヴィア文明の影響下にあったことをトインビーは認めている。

トインビーのロシア観とスラヴ¹¹観
—『歴史の研究』における西欧文明の第一の比較対象として—

この千百年の間に三度ロシアは外国から異質の文明を受取った。最初はスカンディナヴィア文明、次いでビザンティン文明、次いで西欧文明である³⁸⁾

スカンディナヴィア文明は各地で「流産」した、というのがトインビーの説であるが、ロシアは、紀元12世紀にスカンディナヴィアの蛮族国家の状態であったという³⁹⁾。では、スカンディナヴィアの文明は、ロシアの地においてどのように「流産」したのであろうか。

ロシアにおける文明は、主として、キエフからノヴゴロドに至る地域に住みついた農民であるスラヴ人が、スカンディナヴィア出身のヴァリヤーギ⁴⁰⁾の支配を受入れて始まった。キエフ・ロシアは、外敵である遊牧社会による無制限の収奪からの安全の保証を、ヴァリヤーギへの徴貢（制限付きの収奪）を認めることによって得る形で国家体制を維持した。それゆえ、一人の政治指導者によってうまく統一された時には、ビザンツ帝国まで遠征するほどの力をもったが、統一する能力をもった政治指導者を失えば、内紛を繰り返した。

このような形で形成された、ロシアにおける文明社会は、下部構造をスカンディナヴィア文明によって整えられ、その後、上部構造をビザンツ文明によって整えられたと考えることができる。同時にまた、12世紀までにキエフ・ロシアが諸公国に分裂し長年内紛状態に陥ったのは、スカンディナヴィアの下部構造にビザンツ文明の上部構造を重ねた結果生じた、文明の構造上の不一致または欠陥によるものと考えることができる。

ただし、トインビーがこのように考えていたかどうかは分からぬ。トインビーに文明の構造論が欠けていたということは、つとに指摘されている通りであるが⁴¹⁾、上で指摘した通り、概念としてまったく無かったというわけではない。この点についてトインビーがロシアにおける文明を「ロシア文明」と命名しなかったわけを、『歴史の研究』第2巻で次のように述べているのは示唆的である。

この〔正教キリスト教文明ロシア種という〕文明がたまたま出現した地理的地域ともっぱら関係があるかのように、われわれはそれに「ロシア文明」という名を与えはしなかつた。元の幹がロシアではなくて他の場所にあるような社会から生まれたものであるという事実を記録に留めるために、われわれはそれを正しくも「ロシアに於ける正教キリスト教文明」と称したのである。そしてこの事実は、ロシアに於ける正教キリスト教文明に類似する文明が樹立され得る範囲を、厳密に限っているのである。それは樹木の成長の特定の段階に於いて元の幹からの分枝が——その分枝は実際にロシアの土に根を下ろしたが——根を下ろすことができる地理的半径を限定する⁴²⁾

トインビーは、自然環境や地理的条件が文明に影響を及ぼすことについて否定的な立場をとったことから、このように述べている。ところが、文明間の接触について論じた後に（完訳版で第16巻）、「ロシア文明」の用語を用いるようになる。また、『歴史の研究』再考察で、「ロシア文明」の用語について説明を加え、文明を「国家の下部構造」と見做すに至っている⁴³⁾。すなわち、ビザンツ文明は、ロシア「国家の下部構造」として現在もロシアで息づいているというのである⁴⁴⁾。

6. 「文化合体」としてのロシア文明

トインビーは、一度は自らが否定した「ロシア文明」の用語を、その『再考察』においてどのように擁護しているのであろうか。

まずトインビーは、「今日までのロシアの文化史は異常な道を辿ってきた」⁴⁵⁾と述べて、ロシア社会のもつ「異常」性を指摘している。そのうえで、次の通りに述べている。

およそ千百年前に世界に入って以来、ロシアは世界の問題に於いて政治的軍事的ならびに文化的に顕著な役割を演じてきた。しかしこれまでのところロシアは独自の独創的な文明を創造しなかった。⁴⁶⁾

トインビーによると、ロシアにおける文明の「異常」性は、その強い自律性と他の文明社会への政治的影響力に比して、独創性を欠いていることがあるという。このことを、他の表現で、「文化的な面ではロシアはこれまで常に衛星であったが、常に異常な衛星であった」と⁴⁷⁾言い換えている。トインビーは、ロシア文明の「異常」性は、その「衛星」としての性質によるというのであるが、そのことを次の通りに説明している。

ロシアは自分を磁場へ引入れた外部の物体に対して、その都度、自らを持ちこたえる以上のことをしてきた衛星だったのである。スカンディナヴィア文明は、ロシアがこれに併合された後まもなく倒されてしまったので、ロシア史のこの短い第一章に於いては、ロシアがスカンディナヴィア本土に強力に反応する時間がなかった。ビザンティン世界および西欧とロシアの結びつきはより長く、この出会いのそれぞれに於いてロシアを引きつけた文明は結局ロシアと綱引き競争をすることになった。そして、この競争では、衛星が太陽の地位を僭取し、もとの太陽を衛星の従属性の地位に陥れることによって両者の役割を逆転させかねなかったのであった⁴⁸⁾。

トインビーがここで「文明」と述べているのは、「宗教」であろう。スカンディナヴィア文明の導入後、ロシアにおいては、スラヴ由来の多神教とスカンディナヴィアの多神教とが融合して、独自の宗教世界を形成していた。しかし、上述の通り、988年にロシアはビザンツ文明からキリスト教を公的に導入した。この時に、少なくとも上層社会からは名目上、多神教が一掃されたと考えられる。また、1453年にビザンツ帝国が滅亡すると、ロシアは正教キリスト教会にとって唯一の政治的庇護者となった。このことが、直接の政治的庇護者を失ったビザンツ教会を「衛星の従属性の地位に陥れる」ことになったのである⁴⁹⁾。現在も、モスクワ総主教教会（ロシア正教会）とコンスタンティノープル総主教教会（旧ビザンツ教会）の競合関係は続いている⁵⁰⁾。

このように、トインビーは、ロシア史にみられる異文明との「結びつき」と「綱引き」について述べ、それらがもたらした結果について論じているが、それが文明全体に関わる問題であったのか、それともその構成要素に関わるものであったのか、という問題に注意を払っ

トインビーのロシア観とスラヴ⁵¹観
—『歴史の研究』における西欧文明の第一の比較対象として—

ていないように思われる。後期のトインビーが、高度宗教を中心として思考していたことは、つとに指摘されており⁵¹⁾、ロシア文明についてもそれが確認できるのである。

以上の問題を抱えながらも、トインビーは、「ロシア文明」の用語を採用して、次に見る通り、それがビザンツ、西欧、イスラムと同種の文明に属することを認めている⁵²⁾。

こうしてわれわれが社会属のなかで「文明」の名称を与える種の内部に於いて、ロシア文明がビザンティン文明、西欧文明、イスラム文明と同じ亜種に属することは明らかである。ロシア文明をビザンティン文明の一変種として分類しようと、或いは西欧文明の一変種として分類しようと、或いはまた独自の性格を持つ別個の文明として分類しようと、それが「文化合成体」に於けるシリック文明とヘレニック文明の融合から生まれた作物の一部であったことは疑いの余地がなかった。⁵³⁾

以上の通り、トインビーは、ロシアにおける文明について、その自然環境や地理的条件に基づいた説明によってではなく、その社会が独自に異文明社会と接触した結果形成するに至った「文化合成体」としての独自性においてロシア文明の名を認めたのである。『歴史の研究』を通じて達したトインビーの観点では、文明間の出会い・接触による「挑戦と応戦」が文明の動的プロセスの原動力なのであろう。

7. トインビーの視角に欠けているもの——モンゴル・タタールの遺産

トインビーは、上述の通り、ロシアが、スカンディナヴィア、ビザンツ、西欧という3つの外国から文明を受取ったという。しかし、それらと比較すると、モンゴル・タタールのことを重視していない。

ロシアの建国は、戦争のすべを持たない、穏やかなスラヴ農民が、スカンディナヴィアの軍人であるヴァリヤーギの統治を受入れて為されたものであった。すなわち、町には民会があり、民会が公を町の警護のために雇い入れるという体裁をとっていた。公たちは、一つの王朝から選ばれ、国全体としては王国の体をなしていたが、それぞれの町と公は契約関係にあった。いわば、キエフ・ロシアは、アイスランドと同種の共和国の連合体であった。それゆえ、トインビーによって、スカンディナヴィア文明に属するが、一国としては全体としてのまとまりを欠いていたことから、蛮族国家と見做されたのである。

この政治制度は、ロシアにおいては、ノヴゴロドにおいて最後まで維持された。つまり、公がいたとはいえ、ノヴゴロドは、公国というよりも共和国といった方が適切であった。

他方、スカンディナヴィア文明の影響をまったく排除した形で誕生したのがモスクワ公国である。モスクワもキエフ・ロシアの他の公国と同様にヴァリヤーギの末裔により統治されたが、モスクワでは、町は公の所有物であり、その住民も公の所有物であった。ノヴゴロドとの最大の違いは、公と町の関係にあった。ノヴゴロドでは、上述の通り、公と町が契約関係にあったのである。

モスクワの統治システムは、モンゴル帝国統治下で発展したモスクワの歴史に直接由来す

る。すなわち、モンゴルの襲来を恐れて北方に逃れた人々は、森を開墾し、モスクワ公に土地を寄進して、その保護を求めた。したがって、寄進された土地は、モスクワ公の所有地であり、そこで働く民も直接モスクワ公に所属した。この形でモスクワの街は発展したのである。

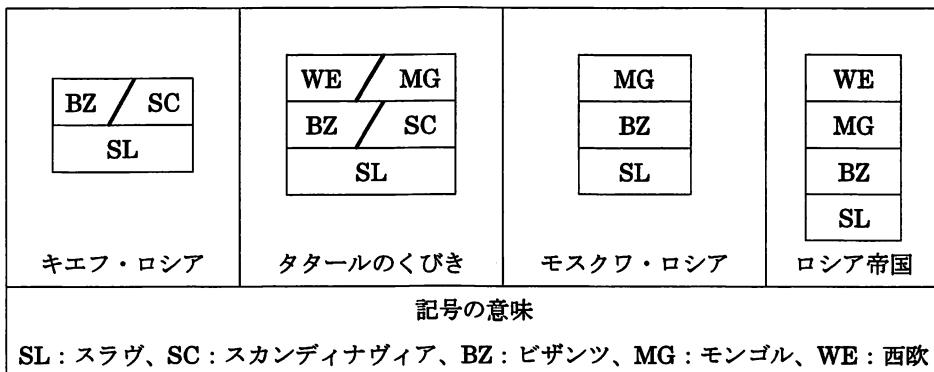
トインビーは、1478年にモスクワがノヴゴロドを征服しロシアを統一したことをもって、ロシアの世界国家の建設と見做しているが、実に、このことは、ロシア史において、スカンディナヴィアに起源をもつ共和制がロシアから一掃された事件だったのである。すなわち、この時をもって、ロシアにおけるスカンディナヴィア文明に由來したロシアの統治システムは、「流產」し、ロシア文明の「誕生が完了した」⁵⁴⁾と考えることができる。

この点に関連して、トインビーは、自らの理論において、ロシア史の重要な概念である「動乱時代 смутное время」を一般化して取り入れていることを指摘しておく必要がある⁵⁵⁾。すなわち、ロシア史における「動乱時代」は、17世紀初頭、リューリク王朝断絶後の、ポーランドの干渉による政治的混乱の時代を指すが、トインビーは、これを文明社会内部の政治的対立と内乱・内戦を意味する用語として採用した⁵⁶⁾。

このため、トインビーから見れば、ロシア史における「動乱時代」は、キエフ・ロシアの分裂、諸侯による内乱の時代を指す概念となる。この内乱は、ロシア文明がスカンディナヴィアとビザンツの「文化合成体」となったという構造的要因を原因としているのではなかろうか。言い換えれば、文化合成の失敗ではなかったか。いずれにしてもこの内乱が、モンゴル帝国の襲来に対して自分たちを十分に守ることができなくなつた一因である。

以上の文明合成の変遷を図示すると図2のように階層構造となる⁵⁷⁾。

図2 ロシア文明の合成



8. 将来の予測について

以上に検討した通り、トインビーの『歴史の研究』において、スラヴは、最初の問題意識の構成要素であり、またロシアは、最後まで文明概念の定義に関わる次元で考察を続けられた素材であった。トインビーはまた、ロシア史について独自の見解を披露したが、その見解に基づいて、ロシアの将来についても述べている。

まず、トインビーの視点では、ロシアは、共産主義の堅持と核兵器の保有によって西欧社

トインビーのロシア観とスラヴ⁵⁸⁾観
—『歴史の研究』における西欧文明の第一の比較対象として—

会にとって欠くことのできない仲間として認められているが、実に、ロシアではすでに共産主義は捨てられている。核兵器の問題は、現在もヨーロッパの頭越しにアメリカとロシアとで交渉が続いている。

また、当時のロシアにおいては、キリスト教プロテstant主義とマルクス主義が相争い、将来のロシアのイデオロギーはこのどちらかになるとトインビーは予想しているが⁵⁸⁾、これは外れている。この予想が書かれた1938年から現在に至るまでにすでに70年余が過ぎ、「ロシアに於いて結局勝利を得る」ことができたのは、東方キリスト教の正教であった。そもそもマルクス主義がロシアにおいて奪おうとした地位を占めていたのは正教であり、ソ連解体と共にロシア社会からマルクス主義が消え去った時に、ロシア人の心に自然と取り戻されたのは正教であった。

このことは、最近のロシアの教育問題にも表れている。すなわち、現在のロシアでは教育改革が進められ、教育法が改正されているのであるが、このことが原因で、児童の学習意欲が失われるケースが増えている⁵⁹⁾。また、共産党時代には、共産党の下部組織であるコムソモール（共産党青年団）やピオネール（ソ連・共産国家における少年団）などが全国的に組織され、学校と結びつきつつ学校とは別に児童の教育や養育を担っていたが、ソ連解体後にそれらが失われてしまい、同時に児童教育に対する配慮も行き届かなくなってしまったという。

ソ連解体後、ロシア正教会は、ロシア連邦教育省と協力関係にあり、公教育の不足している部分を補うように、公立学校で正教会の神父がキリスト教教育を施している⁶⁰⁾。現在のロシアに見られる国家と教会の協力関係は、信仰の自由が保障され、また政教分離の原則が実現している点で、帝政時代とは区別されるべきである。麻薬で年間3万人が死んでおり、麻薬使用者の3分の2が30代以下の若者であることなど⁶¹⁾、青年層の教育を担う団体を必要としているロシア社会の実態が、正教会に対する人々の期待を高めているという側面も否定できない。

西欧社会の将来との関連で言えば、トインビーは、「誰が新しい政治的創造者になるのだろうか。それはイタリア人かドイツ人かもしれない。或いはロシア人か中国人かもしれない」⁶²⁾と、ロシアの将来に期待をかけるような予測も立てている。また、ロシア、インド、中国、ブラジルが「巨大国」に成長して、西欧社会を「包囲する」可能性にも触れている⁶³⁾。トインビーが取り上げた4国は、まさに21世紀最初の10年間に世界経済の牽引役となり、BRICsと一括して称されている。

また、『歴史の研究』を書きあげた後にトインビーは、アメリカとソヴィエトが「世界国家」の建設に至らなければ、次にその役割を担うのは、中国であろうと、また、「中国は、やがて、世界において嘗て占めておりましたような立場、位置を回復するに違いない」、「東アジア大陸における中国の地位というものは、新世界におけるアメリカ合衆国の地位と相等しいような地位にまで高まるのではないかと思う」⁶⁴⁾という予測も立てている。この予測は現在、的中しつつある。

9. おわりに

以上の考察から、『歴史の研究』におけるトインビーのロシア観とスラヴ観について、次のように述べることができる。

第一に、『歴史の研究』においてトインビーは、ロシアとスラヴを正教キリスト教文明の枠の中で論じようとして、後にこの計画を断念した。

第二に、トインビーが、『歴史の研究』で問題を提起した時、その問題の事例としてスラヴは重要な素材であった。すなわち、フランスを分析する上で、第一のそして格好の比較対象がチェコスロvakiaとユーゴスラヴィアであった。スラヴは、西欧社会を理解する上で、不可欠な要素だったのである。

第三に、トインビーにとって、ロシアは、ビザンツ文明と西欧文明の強い影響力を受けて、かつ、それらの文明に挑戦し得る力をもった文明であった。すなわち、ビザンツ文明に対しては、自らの母教会であるはずのビザンツ教会を凌駕するほどの規模と確固たる体制をもつた教会を形成し、また西欧文明に対しては、マルクス主義を掲げ、また核兵器を保有することにより、対等の思想と軍事力をもとうとした。これらの歴史的事実が、トインビーのロシア観に大きな変化を余儀なくした。

第四に、トインビーにとって、ロシアのピョートル一世は、西欧社会と非西欧社会の間にその後、閉じることのできない窓を開いた、世界史における英雄である。ピョートル以後、ロシアをはじめとして、世界中の非西欧社会が、西欧社会を模倣し始めた。いわゆる西欧化=近代化の始まりである。このことにより、非西欧社会は人々と西欧社会に注目し始めたが、それと一緒に、西欧社会も非西欧社会に目を向けねばならなくなった。

なお、冷戦後、ロシアと中国が、西欧社会（日米を含む）と比較して急速に発展したことについて付言する。トインビーは、10世紀に2度にわたって繰り広げられた正教キリスト教文明本体における覇権争い⁶⁵⁾の結果を論じている。すなわち、この争いの時代は、トインビーの理論では、「動乱時代」に該当する。この争いは、正教キリスト教文明本体内部の乱であり、その「世界国家」を「解体」へと追いやった。この争いで勝利したのはビザンツであったが、正教キリスト教文明本体は、すでに解体へと向かっていた。その一方、文明社会において復興・発展しやすいのは、社会の中心ではなく、辺境であり、またヒンターランドであるというのが、トインビーの理論である。覇権争いに敗れたはずのブルガリアは、勝利したビザンツよりも速やかに復興した。トインビーは、このことを上の理論から説明しているが、この事例解釈を冷戦後の現代に適用できるのではないか。すなわち、旧東側のロシアと中国は、冷戦に敗れたのであるが、前者は西欧のヒンターランドとなり、また後者は日本のヒンターランドとなる一方で、両者は西欧文明の辺境となった。それゆえ、両者ともに西欧社会の旧西側よりも速やかに復興・発展できたと考えることができるるのである。

以上の通り、トインビーの『歴史の研究』において、ロシアとスラヴおよび西欧は、互いの理解と叙述に不可欠な要素であり、また、トインビーの『歴史の研究』は、21世紀の現代を理解するうえでも有益な理論・概念を見出すことができる「宝庫」のままである。

トインピーのロシア観とスラヴ¹⁾観
—『歴史の研究』における西欧文明の第一の比較対象として—

付記

本稿は、2009年9月19日の比較文明学会第86回研究例会における筆者の発表を、その時の質疑応答を踏まえて大幅に加筆修正したものである。示唆に富んだ貴重なコメントまた質問を頂いた先生方に厚く感謝申し上げる。

註

- 1) 日本語表記として、「スラブ」と「スラヴ」のどちらを用いるかという問題がある。トインピーの完訳版では前者が用いられているが、ここでは原語の発音表記を優先して後者を用いた。
- 2) 山本新『わかりやすいトインピー』(経済往来社、1976年) 3頁。
- 3) 本稿では、完訳『歴史の研究』全25巻(下島連ほか訳、「歴史の研究」刊行会、のち経済往来社、1966-1972年)を用いた。
- 4) 「周辺文明」の用語は、フィリップ・バグビーがその『文化と歴史』において用意したが、その概念は、トインピーの『歴史の研究』にすでに見ることができる。トインピーは、周辺文明ではなく、衛星文明の表現を用いた。
- 5) Фигуровская, В.М. Исторические пути России (отв. ред. Донских, О.А., Россия как цивилизация, Новосибирск. 2008 г.) 39頁。
- 6) 堤彪『比較文明論の誕生』(刀水書房、1988年) 74頁。
- 7) 山本新『トインピーと文明論の争点』(勁草書房、1969年) 96-97頁。
- 8) 完訳『歴史の研究』第1巻20頁。
- 9) 同第1巻21頁。
- 10) 同第1巻44頁。
- 11) 山本新『わかりやすいトインピー』172-174頁。
- 12) この変化は、完訳版で言えば、第12巻から第16巻にかけて緩やかに見ることができる。このことについては、「ロシヤ文明も、日本と同じく「わかれ」から「衛星文明」に格下げされた。「わかれ」という範疇が捨てられた。ロシヤ文明はイラン文明とともに、かなりの自律性を發揮し、「独立文明」に近いものとされている」(山本『わかりやすいトインピー』180頁)という指摘がある。
- 13) 山本新『トインピーと文明論の争点』115頁。
- 14) 完訳『歴史の研究』第3巻125頁。
- 15) 同第4巻30頁。
- 16) 同第3巻127頁。
- 17) 同第1巻92頁。
- 18) 同第4巻156頁。
- 19) 同第4巻176-168、同第5巻35頁ほか。
- 20) 同第3巻155-156頁。キエフ・ロシアからモスクワ・ロシアへ至る東スラヴ人とその国名「ルーシ」については、栗生沢猛夫「中世「ロシア人」の「民族意識」——「ルーシ」

にみられる東スラヴ人の自己認識の問題」（上村忠男ほか編『歴史を問う3 歴史と空間』岩波書店、2002年）を参照されたい。

- 21) ブルガリア人は、10世紀に2度、ブルガリア・ローマ大戦争（913－27年と977－1019年）を引き起こした。トインビーは、これらの戦争を、正教キリスト教世界・本体を挫折させ、その「世界国家」であるビザンツ帝国の解体をもたらした「動乱時代」と見做している（完訳『歴史の研究』第7巻119, 118－120, 136, 148－149, 185、同第8巻124, 204, 241頁、同第9巻32, 62頁、同第12巻316頁）。また、セルビア人は、19世紀末に独立紛争を引き起こしたが、トインビーは、これを、オスマン帝国治下の正教キリスト教世界・本体を挫折させ、その「世界国家」であるオスマン帝国を解体へと追いやった、もうひとつの「動乱時代」と見做している（同第10巻44頁）。
- 22) 第9回配本付録「歴史の研究」刊行会『歴史の研究』9。
- 23) 同2頁。
- 24) 同3頁。
- 25) 同3頁。
- 26) 同3頁。
- 27) 完訳『歴史の研究』第4巻109－110頁。
- 28) 同第23巻1120頁。
- 29) 同第7巻135頁。
- 30) 同第23巻1042頁。
- 31) 同第3巻275頁。
- 32) 同第3巻125頁。
- 33) 同第12巻229頁。
- 34) 同第13巻19頁。
- 35) 同第16巻197頁。
- 36) トインビーは、「ロシアがその神聖な保存所である真実の信仰としてビザンティウムに生まれた正教キリスト教に代えるのに、西欧に生まれたマルクスのイデオロギーを持ってした」（同第16巻233頁）と、また、「ピヨートル大帝の精神」すなわち「世俗文化の魅力への自発的屈服」（同16巻233頁）が、正教キリスト教の精神であり、さらに、正教もまたマルクス主義も「近代自由主義と戦うことのできる唯一の信仰」（同第16巻234頁）であって、その意味で同じ価値を持つという。
- 37) 小林道憲「複雑系としての文明」（『比較文明』20、2004年）161頁。
- 38) 完訳『歴史の研究』第23巻1003頁。
- 39) トインビーは、当時のロシアについて「キエフのスカンディナヴィア蛮族候国のこれに似た分裂」と述べている（同第16巻116頁）。
- 40) ヴァリヤーギと当時のロシアすなわち「ルーシ」の関係については、栗生沢猛夫「中世「ロシア人」の「民族意識」——「ルーシ」にみられる東スラヴ人の自己認識の問題」を参照。

トインビーのロシア観とスラヴ¹¹観
—『歴史の研究』における西欧文明の第一の比較対象として—

- 41) 山本新『トインビーと文明論の争点』98頁および吉澤五郎「文明の芸術様式・試論：「聖なる美」の比較文明学」(『比較文明』21、2005年)7頁。
- 42) 完訳『歴史の研究』第2巻123頁。
- 43) 「ロシア文明」と「ロシアに於けるビザンティン文明」の相違について、トインビーは、「私は、ビザンティン文明がまだ一皮剥げばロシアのなかに生きている…と主張しているのである」(同23巻1003頁)と、また、ここでいう「ビザンティン文明」は、「ビザンティン国家の下部構造」のことであるという(同23巻1003頁)。
- 44) ただし、ここでいう「下部構造」の意味するところについては、別途考察を要する。
- 45) 同第23巻1003頁。
- 46) 同第23巻1003頁。
- 47) 同第23巻1004頁。
- 48) 同第23巻1004頁。
- 49) 拙稿「総主教ニーコンの改革に関する比較文明論的考察」(『比較文明』20、2004年)を参照。
- 50) この数年の競合関係を裏付ける事例として、例えば、2007年のトルコ上告裁判判決の評価が上げられる。すなわち、トルコの上告裁判所は、コンスタンティノープル総主教教会がトルコ領内のブルガリア正教会にも管轄権を有するとの判決を下したとき、アメリカ合衆国はこれを批判したが、モスクワ総主教教会はこれを静観した(2007年8月15日付Независимая газета)。また、2008年には、ルーシの洗礼1020年記念が祝われたが、この際、ウクライナのユーシェンコ大統領は、コンスタンティノープル総主教ヴァルフォロメイ1世とモスクワ総主教アレクシイ2世を招待しつつ、このことがロシアの政治的経済的影響力に結びつくことを避けるために、政治的には無力なコンスタンティノープル教会を優遇した。ウクライナにおける正教会は、モスクワの管轄権を認めるグループ、コンスタンティノープルの管轄権を認めるグループ、自治権を主張するグループに分裂し、自治権を主張するグループが最大勢力を保持しているが、ユーシェンコ大統領は、分裂したウクライナ教会3派の協力を呼びかけている(2008年6月4日付Независимая газета)。さらに、2008年に永眠したアレクシイ2世に代わり、2009年1月にモスクワ総主教に選出されたキリル1世は、アメリカのオバマ大統領と面会し、自らと正教会全体の存在をアピールしている(2009年10月29日付Независимая газета)。
- 51) 山本新『分かりやすいトインビー』175頁。またトインビーは、歴史認識の「先行研究」として、キリスト教の『旧約聖書』とゲーテの『ファウスト』を挙げている。
- 52) 次いでロシア文明の用語が登場するのは、第23巻1007頁であり、ここでは、スラヴ主義の主張として「西欧文明は退廃していくロシア文明こそ「未来の波」である」という文脈で表れている。
- 53) 完訳『歴史の研究』第23巻1008頁。
- 54) 「文明の誕生の完了」という概念については、山本新『トインビーと文明論の争点』115頁を参照。

- 55) 完訳『歴史の研究』第7巻146－147, 152頁、同第8巻185頁、同第10巻70頁。
- 56) ロシア教会史においても、動乱 смута の語は、17世紀のニーコンの改革や1917年の革命以後の時代に対しても用いられることがある。「動乱時代は、均衡のとれた状態への体系の復帰か、体系の不可逆的な解体により終わる（後者の例としては、アッシリヤからソヴィエト連邦を含め、時代を問わず地上に存在した帝国の存在の終わる最終段階となることもある）」（Штуден, Л.Л. Русская смута в ХХI веке (Россия как цивилизация) 88頁）。
- 57) この「階層」は、ロシア語の語彙を調査することにより確認することができよう。「言語は文明についていく」というテーゼについては、大野晋「日本語の将来」（『比較文明』16、2000年）を参照。
- 58) 完訳『歴史の研究』第10巻149頁。
- 59) 学習意欲が失われ、中途退学者が増加している理由の一つは、教育法が改正され、義務教育期間を15歳までと規定したことにあると推定されている。すなわち、義務教育が終われば、学費が必要になるから、そもそも卒業見込みのない児童は、学習意欲を失うと考えられている。普通学校の40%の生徒の家庭が貧困層にある現状に鑑みれば、そのことは理解できよう。このため、2000年の改正で、「親（親権者）と地方の教育行政機関との合意により、15歳の年齢に達した学習者は、基礎普通教育を習得するまで、普通教育機関に留め置かれる」（第19条第6項）となった（堀内明彦「《翻訳》ロシア連邦教育法」2008年より）。
- 60) 2008年6月23日付Los Angels Times。
- 61) 2009年9月9日付読売新聞。
- 62) 完訳『歴史の研究』第8巻275頁。
- 63) 同第6巻130頁。
- 64) 完訳『歴史の研究』第9回配本付録「歴史の研究」刊行会『歴史の研究』9、7頁。
- 65) 913－927年と977－1019年のブルガリアとビザンツ両帝国の戦争。この戦争については註21を参照されたい。